世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

三宝荒神の像容と金剛夜叉明王像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学仏教文化研究所 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 三宝荒神, 金剛夜叉明王, 障礙神, 護法善神 キーワード (En): 作成者: 辻本, 臣哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000239

The Appearance of Sanpokojin and the Statue of Kongoyasha Myoo

TSUJIMOTO Shinya

Summary

This paper researches the origins of the appearance of Sanpokojin. Studies on statues of Sanpokojin indicate the prevalence of the three-faced, three-eyed, six-armed image in sculpture and of the eight-faced, three-eyed, eight-armed image in painting. This paper has two purposes: 1) to examine what kind of literature these images are based on and 2) to determine the origin of the three-faced, three-eyed, six-armed image. We found a basis in literature for the eight-faced, three-eyed, eight-armed image but not for the three-faced, three-eyed, six-armed image. This paper focuses on the similarities between the image of the three-faced, three-eyed, six-armed Sanpokojin and the statue of Kongoyasha Myoo, noting that the creator of the three-faced, three-eyed, six-armed Sanpokojin refers to the statue of Kongoyasha Myoo. In pre-Buddhist times, both Sanpokojin and Kongoyasha Myoo were trouble-making deities. After the local population converted to Buddhism, both were transformed into Goho-zenjin--good deities maintaining the Dharma of Buddhism. This shared transformation explains the likeness between the image of Sanpokojin and that of Kongoyasha Myoo.

三宝荒神の像容と金剛夜叉明王像

辻　本　臣　哉

〈研究ノート〉

三宝荒神の像容と金剛夜叉明王像

辻本臣哉

〈キーワード〉 三宝荒神／金剛夜叉明王／障礙神／護法善神

はじめに

荒神は、正式な仏教の経典にその根拠が示されていない、日本における民間信仰の神である。荒神といっても、火の神、竈の神とされる三宝荒神、地域の守護神となっている地荒神、その他屋敷神や同族神として祀られている荒神などもある。また、荒神の研究は、仏教学や文学だけでなく、民俗学によっても研究されてきた。[1] したがって、荒神といってもその範囲はかなり広いため、本稿では仏・法・僧の三宝を守るとされる三宝荒神を研究対象とする。三宝荒神は、仏教色が強いが、修験道、神道、陰陽道とも密接な関係を持っている。三宝荒神が、『大日経疏』に説かれる剣婆と同一視され、また、火の神、竈の神として火を防ぐことが信仰されるようになったのは後代のことである。そのため、本稿では、三宝荒神の原始の信仰に遡り、その像容について考察する。

仏教美術における三宝荒神の先行研究は限られている。そうした中、石川知彦氏は、現存している三宝荒神像について分析を行っている。その結果、彫刻における三面三目六臂像と、絵画における八面三目八臂像が主流であることを指摘している。[2] ただし、こうした三宝荒神の像容の起源については研究が行われていない。したがって、本稿の第一の目的は、これらの像容がどのような文献に基づいているかについて検証する。結論から申し上げると、文献的には八面三目八臂像についての記載はあるが、三面三目六臂像を見つけることができない。したがって、本稿の第二の目的は、彫刻に多い三面三目六臂像の起源を求めるものであり、その方法として、密教の明王像との類似性から考察する。三宝荒神の像容が密教の明王に類似していることは指摘されている。本稿では、数ある明王像の中でも金剛夜叉明王像との関係について検討する。検討に際し、三宝荒神及び金剛夜叉明王において、障礙神が護法善神へ転換するという共通性に注目する。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、先行研究によって示された、現存する三宝荒神像の種類とその像容を紹介する。次に、現存する三宝荒神の像容についてどのような文献的な裏付けがあるかどうか検証する。検証の結果、三面三目六臂像については、文献的にその起源を見つけることができなかったため、この像容の起源について考察する。そして、三宝荒神の三面三目六臂像と最も類似点の多い東寺講堂の金剛夜叉明王像を取り上げる。さらに、三面三目六臂という三宝荒神の像容が、金剛夜叉明王像を参考にした可能性を検討するため、両尊の性格の共通性について検証する。検証に際し、両尊の障礙神から護法善神に転換する共通性に注目する。最後に、結論と今後の課題を述べる。

一　現存する三宝荒神像の種類とその像容

石川知彦氏は、三宝荒神像の遺品について包括的な研究を行っている。まず、彫刻では、最古となるのが、平安時代後期の制作と考えられる、金峯山経塚出土品の三面三目八臂像（奈良国立博物館蔵）である。その後、室町時代に四躯制作されたのが確認されるが、庫蔵寺（三重県）木彫のみが八面三目八臂座像で、浄妙寺（神奈川県）木彫、伽耶院（兵庫県）木彫、地蔵院（滋賀県）木彫の三躯が、三面三目六臂立像である。一方、絵画では、鎌倉時代から室町時代に制作された十三例のうち、九例が八面三目八臂立像または座像であり、残りは、八面三目二臂立像または座像が二例、五面三目十臂座像、八面二目八臂立像がそれぞれ一例ずつである。[3]三宝荒神像の主流は、彫刻に多い三面三目六臂像と、絵画に多い八面三目八臂像となる。

二　三宝荒神及びその像容についての文献的考察

三宝荒神は、日本で撰述された偽経『仏説大荒神施与福徳円満陀羅尼経（大荒神経）』に説かれている。この経では、仏の前に、天女が現れ、三宝荒神について語る。過去仏・空王如来の三人の使者が、飢渇神、貧欲神、障礙神であり、末世に荒神として顕現し、衆生に害をもたらすことを請願していると言う。そこに、この三名の鬼王が現れる。そこで、仏は、慈悲と忿怒は車の両輪であると説く。また荒神は、如来の化身であり、

衆生に強い信仰と精進を勧めるため、このように顕現していると語る。さらに、この三名は、大日如来、文殊師利、不動明王であるとともに、貪瞋痴の三毒でもあることを説いている。三宝荒神の類似した話は、同じく日本で撰述された偽経『仏説宇賀神王福徳円満陀羅尼経』にも登場する。

三宝荒神を感得したと伝えられるのは、役小角（生没年不詳）、勝尾寺の開成（七二四～七八一）、子島寺の真興（九三五～一〇〇四）の三名である。まず、役小角の三宝荒神感得は、『真俗仏事編』巻之一祈祷編に「大和国城上郡鷲峰山竹林寺記に曰く」として、その像容は首に宝冠を戴いており、六臂を持つと記載されている。そして、右の第一手に独鈷、第二手に蓮華、第三手に宝塔、左第一手に鈴、第二手に宝珠、第三手に羯磨を持っている。[4] この像容は、室町時代の彫刻に多い、三面三目六臂立像と類似していることから、この縁起に従って三面三目六臂立像が造られたのではないかと考えられる。しかし、実際の『笠荒神鷲峯山竹林寺來由記』では、役小角の感得については記載されているが、三宝荒神の像容については記されていない。したがって、『真俗仏事編』における三宝荒神の像容は、後から書き加えられた可能性が高い。すなわち、逆に実際の三面三目六臂立像を基に、その像容が書き加えられたのではないかと思われる。

次に、勝尾寺の開成の三宝荒神の感得については、『摂州島下郡応頂山勝尾寺支証類聚第一縁起（勝尾寺流記）』によると、夢に八面八臂の鬼神が千万の眷属とともに現れたと説かれている。[5] 鈴木佐内氏によれば、この部分は、寛元元年（一二四三）に沙弥心空なる者によって記された。さらに、心空は、縁起作成にあたって古記録を参考にしていることから、この縁起の内容が書かれたのは、それ以前に遡ることができる。[6]

最後に、子島寺真興の三宝荒神の感得については、『子島山観覚寺縁起』に記載がある。しかし、ここでは、その像容については記されていない。[7] したがって、縁起等の文献で記された三宝荒神の像容は、八面八臂ということになる。平安時代、少なくとも鎌倉時代の初めには、三宝荒神の像容として認識されていたと思われる。

その結果、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代に造られた八面三目八臂の三宝荒神の画像は、勝尾寺の開成の感得縁起が基となっていると考えられる。

最後に、三宝荒神の像容について、時代は下がるが、一六九〇年発行の『仏像図彙』に記載がある。ここには、二種類の三宝荒神が描かれている。一つは、忿怒形の三面三目六臂立像で、左手に五鈷鈴、戟、弓を、右手に五鈷杵、剣、矢を持っている。室町時代の彫刻に多い、三面三目六臂立像と類似している。これは、逆に三面三目六臂立像の彫刻像を基にして、描かれたものと考えられる。もう一つは、子島寺真興が感得したと伝わる子島荒神で、雲の上に坐する一面二目四臂座像で、左手に五鈷鈴と羯磨、右手に五鈷杵、宝輪を持っている。また、像の前に白蛇がとぐろを巻いた姿を描いていることから宇賀神信仰との関連が指摘できる。この三宝荒神の像容は、鎌倉時代や室町時代の彫刻や絵画に見られない。

以上から、八面三目八臂像は、文献によってその裏付けが得られるが、三面三目六臂像については、文献上は見つけることができない。したがって、次章では、三面三目六臂像の起源について、明王像など他の像容を参考にした可能性について検証する。

三　三宝荒神の像容と金剛夜叉明王像の類似性

前述したように、三面三目六臂立像が確認されるのは、浄妙寺（神奈川県）木彫、伽耶院（兵庫県）木彫、地蔵院（滋賀県）木彫の三躯である。まず、浄妙寺（神奈川県）木彫は、左手に五鈷鈴、宝弓、日輪、右手に五鈷杵、宝箭、月輪を持っている。次に、伽耶院（兵庫県）木彫は、左手に五鈷鈴、羂索、宝珠、右手に五鈷

杵、宝剣、鉞を持つ。最後に、地蔵院（滋賀県）木彫は、左手に五鈷鈴、宝弓、宝珠、右手に五鈷杵、宝箭、戟を持っている。三躯とも、第一手に五鈷鈴と五鈷杵を持っていることが共通している。第二手、第三手では、宝弓、宝箭、羂索、宝珠、鉞、戟などが持たれている。

こうした三面三目六臂立像の三宝荒神の像容に類似したものとして、金剛夜叉明王像が挙げられる。東寺講堂の金剛夜叉明王像は、三面五目六臂立像で、左手に五鈷鈴、宝弓、羂索、右手に五鈷杵、宝箭、宝剣を持っている。[8] 金剛夜叉明王像は、三宝荒神のように三目ではなく、五目であるが、三面六臂であることが共通であり、左右の手に持っているものが似ている。愛染明王像も、三目で六臂、かつ左右に持っているものも類似しているが、三面ではなく一面である。やはり、三宝荒神の像容は、金剛夜叉明王像に最も似ていると言える。[9]

ここで、三宝荒神と類似した像容を持つ東寺講堂の金剛夜叉明王像について見てみる。東寺は、平安遷都後、王城鎮護、国家鎮護の寺として造営されたが、弘仁十四年（八二三）、空海（七七四～八三五）が、嵯峨天皇（七八六～八四二）から下賜され、真言密教の根本道場となった。この東寺講堂には、五智如来、五大菩薩、五大明王、四天王、梵天、帝釈天の二十一尊像が安置されている。[10] これらの諸尊の制作は、天長十年（八三三）、即位したばかりの仁明天皇（八一〇～八五〇）の病気治癒を祈願して開始され、承和六年（八三九）に開眼供養が行われた。二十一尊像のうち、五智如来像と五大菩薩像の中尊は、文明十八年（一四八六）の土一揆によって、講堂火災の際、焼失してしまったため、現在のものは再興像となっている。一方、金剛夜叉明王像を含めた他の諸尊像は、当時のままで保存されており、この五大明王像は、日本において現存する最古の作例となる。[11]

五大明王像は、中央に不動明王像、東に降三世明王像、南に軍荼利明王像、西に大威徳明王像、北に金剛夜叉明王像が配置されている。五大明王は、不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』が根拠となって

いると言われているが、その像容については、東寺講堂の五大明王像と一致していない。[12] 金剛夜叉明王像については、その尊格さえも一致していない。[13] 金剛夜叉明王像の三面五目六臂の像容については、単独尊として、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』に説かれている。

東寺講堂の五大明王像の像容については、「仁王経五方諸尊図」との関連が指摘されてきた。両者の像容は、極めて類似している。「仁王経五方諸尊図」は、『仁王経』の布教のために作成された御筆本であるが、その伝来や時期については、詳しいことはわかっていない。しかし、東寺講堂の五大明王像の造立以降に作成されたと考えられる。すなわち、「仁王経五方諸尊図」が東寺講堂の五大明王像の像容を取り込んだ可能性が高い。奥野早輝子氏は、「仁王経五方諸尊図」の制作に際し、東寺講堂の五大明王像に倣った五大明王像を描くことによって、御筆本の権威を高めようとしたという意図があったことを指摘している。[14] 五大明王像は、その後、多様化していくが、「仁王経五方諸尊図」に使われたように、金剛夜叉明王像を含めた東寺講堂の五大明王像の像容は、当時の標準となっていたと考えられる。したがって、三宝荒神像の像容についても、当時一般的であった東寺講堂金剛夜叉明王像を倣った可能性はある。

三宝荒神と金剛夜叉明王像の類似性を示す例として、道川神社（秋田県）に祀られている三面三目六臂座像二躯が挙げられる。この二躯の仏像は、伝金剛夜叉明王坐像と愛染明王坐像として伝わっている。石川知彦氏は、この二躯の仏像が、どちらも三宝荒神として造立されたと主張する。氏によれば、制作年代は、伝金剛夜叉明王坐像が鎌倉期中期、愛染明王坐像は鎌倉後期と想定されている。愛染明王坐像が愛染明王一般の像容と異なっていたことから、修理の際に、愛染明王としての特徴を付加されている。例えば、頭上の獅子冠や日輪形の円光背などが付け加えられている。この二躯が、三宝荒神として祀られていた資料は見つかっていないが、修験によってもたらされたものの、この地方にとって三宝荒神が馴染みの薄い尊容で、信仰

が衰退してしまったと考えられる。[15] その結果、明王として祀られるようになった可能性が高い。愛染明王座像はその像容が異なることから、修理の際に、愛染明王の特徴が付け加えられたが、伝金剛夜叉明王坐像では、その必要がなかったと考えられる。それほど、三宝荒神と金剛夜叉明王像の像容が似ていたと思われる。

以上、三宝荒神の三面三目六臂立像と金剛夜叉明王像の類似性について指摘してきた。三面三目六臂立像が金剛夜叉明王像を参考にした可能性を考えるためには、三宝荒神と金剛夜叉明王との共通性について検証する必要がある。以下の章では、両尊の性格について考察を加える。

四　三宝荒神の性格（毘那夜迦との同体説）

三宝荒神は、密教、修験道、神道などの教義が複雑に絡みあっている。仏教経典に見られない神であるが、密教との関連性は高い。もともと密教と修験道・神道（両部神道など）の関係は密接であることから、三宝荒神は、密教、とくに真言宗の影響を受けていると考えられる。前述した『笠荒神鷲峯山竹林寺來由記』での三宝荒神の感得者は、修験道の祖とされる役小角であるが、『子島山観覚寺縁起』での三宝荒神の感得者真興は、真言宗の僧である。さらに、奈良県の立里荒神社の縁起『三宝大高荒神略縁起』では、三宝荒神の感得者は空海（七七四～八三五）とされている。[16] したがって、ここでは、真言宗で、三宝荒神がどのようにとらえられていたかについて考察する。

金本拓士氏は、頼瑜（一二二六～一三〇四）撰述の『真俗雑記問答鈔』における、荒神についての記載に注目する。ここでは、荒神は陰陽師によって使われるものであって、仏教では毘那夜迦であるとされる。頼瑜に

よる荒神と毘那夜迦の同体説は、頼瑜と同時代人である学僧教舜（生没年不詳）も同意している。教舜の『秘鈔口決』でも、荒神が障礙神であり、毘那夜迦であると述べている。さらに、荒神供は外法であると説いている。[17]

こうした真言宗による荒神と毘那夜迦の同体説は、真言宗以外でも受容された。台密の儀軌「十八契印儀軌」『阿婆縛抄』（十三世紀頃成立）や神道の『神道雑々集』（一三三二成立）でも、荒神が毘那夜迦であることが説かれている。[18] 十三世紀から十四世紀にかけて、荒神・毘那夜迦同体説は、一般に普及していたと考えられる。

毘那夜迦（歓喜天、聖天）は、ヒンドゥー教の神・ガネーシャを仏教が取り入れたものである。人々に障害をもたらす障礙神であったのが、仏教に帰依して護法善神となった神である。例えば、真言宗の僧覚禅（一一四三～没年不詳）撰述の『覚禅鈔』では、毘那夜迦による障礙神から護法善神への説話が記載されている。摩羅醯羅州の王は、国に食べるものがなくなると、死人の肉を食べ始め、そしてついには生身の人間を食べるようになった。民衆は、王と戦おうとしたが、王は「大鬼王毘那夜迦」となり、姿を消してしまう。その後、この毘那夜迦のため、国中に疫病が蔓延した。人々は、十一面観音に助けを求めたところ、観音は毘那夜迦女の姿に変化して、毘那夜迦となった王を改心させた。そして疫病が収束し、国に平和が戻ったという話である。[19]

ちなみに、『覚禅鈔』に毘那夜迦の像容も収められているが、その中に、一面一目六臂立像と三面三目四臂座像（どちらも単身）がある。三面三目六臂立像の三宝荒神像との関連があるのかもしれない。[20]

五　三宝荒神における障礙神から護法善神への転換

前章で、毘那夜迦が障礙神から護法善神に変化したことを述べたが、三宝荒神も同様の性格を有する。前述した『大荒神経』でも、障礙神として三宝荒神が記されている。ただ、衆生教化のため、障礙神としての役割を担っていると考えられるため、毘那夜迦のような障礙神から護法善神への転換とは若干異なっている。しかし、これも前述した『勝尾寺流記』では、三宝荒神は多数の眷属を伴って悪事を働き、自らが祀られることを強要する。そして、祀られることによって護法善神となる。[21]『勝尾寺流記』に登場する三宝荒神の方が、毘那夜迦に近い。障礙神から護法善神への転換という性質から、三宝荒神と毘那夜迦が結びつけられたと考えられる。

毘那夜迦と似た例として、吒枳尼天がある。人肉を食べるヒンドゥー教の神・ダーキニーは、大黒天に調伏され、護法善神として吒枳尼天となった。大黒天（摩訶迦羅天）自体も、ヒンドゥー教の神・シヴァの化身とされるマハーカーラを仏教に取り込んだ護法善神である。また、マハーカーラ自体も破壊の象徴であったことからも、大黒天についても障礙神から護法善神になった例としてとらえられないわけではない。

障礙神としての過去を持つ護法善神は、願いをかなえてくれる一方、信仰を止めたり、粗末に扱ったりすると祟りがあると言われる。いわゆる「怖い神」とされるもので、毘那夜迦や吒枳尼天も、そうした性格を持つ。そのため、同様の性格を持つ別の神と習合しやすい。摩多羅神も、仏典に出てこない神であるが、光宗（一二七六～一三〇九）の『渓嵐拾葉集』では、吒枳尼天、摩訶迦羅天とされている。[22]また、摩多羅神は、唐から船

で帰途につく円仁（七九四～八六四）に対し、自分は障りをなす神であり、祀らないと往生の願いが成就されないと言う。[23] まさに、障礙神である。また、『勝尾寺流記』の三宝荒神の話と類似している。

山本ひろ子氏は、『北院御室拾要集』の「東寺夜叉神事」に、東寺に贈られた夜叉神像について記載されていることに注目する。夜叉神は、三面六臂で、中央が聖天（毘那夜迦）、左が吒枳尼天、右が弁才天となっている。そして、この夜叉神が摩多羅神であると説かれている。[24] ここで、夜叉神と毘那夜迦が結びつき、毘那夜迦を通じて三宝荒神と結びつくことになる。

六　金剛夜叉明王における障礙神から護法善神への転換

金剛夜叉明王及びその三面五目六臂の像容については、前述した『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』に説かれている。金剛夜叉明王は、人を喰う恐るべき鬼神であったが、大日如来の威徳で改心し、忿怒神として一切諸悪を喰うことを誓ったとされる。金剛夜叉明王の名の基となっている夜叉自体も、人を喰う鬼神であり、仏教に取り入れられ、八部衆の一尊、または毘沙門天の眷属として護法善神に転換している。[25] まさに、三宝荒神・毘那夜迦と同様、障礙神から護法善神に変化している。三宝荒神が、金剛夜叉明王と類似した性質を持っていると考えられる。

北方に配置される金剛夜叉明王以外の五大明王は、中央の不動明王、東方の降三世明王、南方の軍荼利明王、西方の大威徳明王となる。不動明王は大日如来の化身、降三世明王はその原形がアスラ族に求められ、軍荼利明王はヒンドゥー教の女神との関連が指摘され、大威徳明王の起源もシヴァ神やアスラ族にあるとされる。[26] 降

三世明王、軍荼利明王、大威徳明王は非アーリア系の民族の神が取り入れられたように思われる。五大明王の中で、障礙神としての性格を最も強く持っているのは、金剛夜叉明王となる。三宝荒神像の三面三目六臂像の制作者が、最も参考にしたのはこの金剛夜叉明王とその像容であったと考えられる。

結　論

現存する三宝荒神の像容は、彫刻に多い三面三目六臂像と絵画に多い八面三目八臂像の二種類が主流である。本稿の第一の目的は、これらの像容が、文献的な裏付けがあるかどうかを検証することである。検証の結果、八面三目八臂像は文献で触れられているのに対し、三面三目六臂像については、文献で見つけることはできなかった。

本稿の第二の目的は、文献的な裏付けのない三面三目六臂像の起源を求めるものである。像容として類似しているものは、東寺講堂の金剛夜叉明王像が挙げられる。真言宗では、三宝荒神は、毘那夜迦として考えられていた。また、この同体説は、一般にも受け入れられていたと考えられる。『北院御室拾要集』の「東寺夜叉神事」に記された三面六臂の夜叉神像の中央の面が、聖天（毘那夜迦）とされている。東寺を通じて、三宝荒神・毘那夜迦と金剛夜叉明王像が結びつけられる。さらに、三宝荒神・毘那夜迦と金剛夜叉明王は、障礙神であったものが仏教によって護法善神となったという共通した性格を有している。どちらも、護法善神となった後も障礙神としての性質を色濃く残している。つまり、三宝荒神と金剛夜叉明王は、習合しやすい土壌があったと考えられる。

三面三目六臂の三宝荒神像の制作者は、東寺講堂の金剛夜叉明王像、あるいはそれに類似した三面五目六臂の金剛夜叉明王像を参考にしたのではないかと考えられる。その結果、道川神社のように三宝荒神像と金剛夜叉明王像が混同されるようなことが起っている。

しかし、課題も残されている。まず、三面六臂の三宝荒神像は三目であるが、金剛夜叉明王像は五目である。また、三面六臂の三宝荒神像の制作者が、金剛夜叉明王像を参考にしたという文献的な裏付けがない。さらに、三宝荒神像と金剛夜叉明王像の類似性の根拠に、両者における障礙神から護法善神への転換に根拠を求めたが、こうした転換はこの両尊に限ったことではない。しかし、それ以上の根拠を見つけるに至っていない。これらは、今後の研究課題としたい。

註

（1）民俗学の視点からの先行研究として、山崎亮　二〇〇二「荒神祭祀論のための覚書～出雲地方を念頭に置いて～」『有馬毅一郎先生退官記念論集』、四九～六二頁、シンシア・ネリ・ザヤス　二〇〇七「淡路島における災害と記憶の文化～荒神信仰を中心に～」『日文研フォーラム』二〇四、一～二七頁などが挙げられる。

（2）石川知彦　二〇一四「三宝荒神像種々相序説」『佛教學研究』七〇、一～三六頁。

（3）石川知彦　二〇一四「三宝荒神像種々相序説」『佛教學研究』七〇、一～三六頁。

（4）子登著『真俗仏事編巻之一 祈祷編』、一八八九年刊、国立国会図書館デジタルコレクション　https://dl.ndl.go.jp/pid/818706/1/8（参照二〇二三年三月四日）

（5）心空著『摂州島下郡応頂山勝尾寺支証類聚第一縁起（勝尾寺流記）』『大日本仏教全書』一一八、一九一二―一九二二年刊、四二三頁。国立国会図書館デジタルコレクション　https://dl.ndl.go.jp/pid/952822/1/217（参照二〇二三年三月四日）

（6）鈴木佐内　一九七八「荒神祓と荒神供～荒神和讃の背景～」『智山学報』二七、一五三～一六九頁。

（7）『子島山観覚寺縁起一巻　付子島山寺建立縁起大師伝一巻』『大日本仏教全書』一一九、一九一二―一九二二年刊、四一～

四六頁。国立国会図書館デジタルコレクション　https://dl.ndl.go.jp/pid/952823/1/29（参照二〇二三年三月四日）

(8)　東寺の寺誌である『東宝記』では、金剛夜叉明王像は、羂索ではなく輪宝を持っていると記載されている。造立当時は、輪宝であったと考えられる。奥野早輝子　二〇二二「「仁王経五方諸尊図」と東寺講堂五大明王像」『美術史論集』二二、一一一～一二三頁。

(9)　三面三目六臂像は、チベットなどに残る葉衣観自在の図像に多くある。佐久間留理子氏によれば、葉衣観自在が、非アーリア系でかつヒンドゥー正統派から否定されていたシャバラ族のイメージから来ていると説いている。葉衣観自在の図像と三面三目六臂像の三宝荒神像と直接の関係があるとは考えられないが、葉衣観自在の図像と金剛夜叉明王像の関係については今後の課題としたい。佐久間留理子　二〇〇二「葉衣観自在の図像」『日本仏教学会年報』六八、一五七～一七〇頁。

(10)　東寺講堂諸像の造立意図については、仁王経曼荼羅説、金剛界曼荼羅説、金剛界法・仁王経法重複説などがあり、コンセンサスは得られていない。原浩史　二〇〇五「東寺講堂五大明王像の造立意図と仁王経法」『史友』三七、三九～六八頁。

(11)　東寺講堂の五大明王像よりは時代が下がるが、同じく平安時代に制作された醍醐寺の五大明王像（上醍醐五大堂本尊）や大覚寺の五大明王像なども、その像容は、東寺講堂のものと類似している。したがって、東寺講堂の金剛夜叉明王像は、当時の標準的な像容と考えられる。

(12)　原浩史　二〇〇五「東寺講堂五大明王像の造立意図と仁王経法」『史友』三七、三九～六八頁。

(13)　不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』では、烏枢瑟摩明王とその像容が記載されている。そのため、台密では、金剛夜叉明王の代わりに烏枢瑟摩明王が、五大明王に加えられている。井筒信隆氏は、五大明王を説く『摂無礙経』に、北方尊として金剛夜叉明王と烏枢瑟摩明王が交互に記載されていることから、東密と台密で五大明王の構成が異なっているとする説を紹介している。井筒信隆　二〇一四「金剛夜叉明王」「特集：明王のすべて―不動・愛染など怒りの仏たち」『大法輪』八月号、一〇三～一〇五頁。

(14)　奥野早輝子　二〇二二「「仁王経五方諸尊図」と東寺講堂五大明王像」『美術史論集』二二、一一一～一二三頁。

(15)　石川知彦　二〇一八「愛染明王の名をもつ三宝荒神像～秋田・道川神社像をめぐって～」『悠久』一五五、七七～九〇頁。

(16)　『三宝大高荒神略縁起』本地垂迹資料便覧　http://www.lares.dti.ne.jp/~hisadome/honji/files/TATERI.html（参照二〇二三年三月十一日）

(17)　金本拓士　二〇〇二「真言宗における荒神の問題」『現代密教』一五、八一～九二頁。

(18) 黒田迪子　二〇一七「荒神：障礙神から竈神へ」『東アジア文化研究』二、一八五～二〇一頁。

(19) 覚禅著『覚禅鈔』『大日本仏教全書』五〇、一九一二―一九二二年刊、二〇九四頁。国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/952730/1/77（参照二〇二三年三月十二日）

(20) 覚禅著『覚禅鈔』『大日本仏教全書』五〇、一九一二―一九二二年刊、二〇六五～二〇六七頁。国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/952730/1/62 https://dl.ndl.go.jp/pid/952730/1/63（参照二〇二三年三月十二日）

(21) 心空著『摂州島下郡応頂山勝尾寺支証類聚第一縁起（勝尾寺流記）』『大日本仏教全書』百一八、一九一二―一九二二年刊、四二三頁。国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/952822/1/217（参照二〇二三年三月四日）

(22) 田中貴子氏は、真言宗小野流の祖、仁海（九五一～一〇四六）及び小野流を通じて、吒枳尼天法と愛染王法が結びついたことを説いている。すなわち、吒枳尼天と愛染明王は密接な関係にあった。田中貴子　二〇〇六『外法と愛法の中世』平凡社。同様に、毘那夜迦と金剛夜叉明王との関係が見つかれば、本稿の結論をサポートするものとなる。今後の課題としたい。

(23) 光宗『渓嵐拾葉集』『大正経』・巻七十六・統諸宗部七、第三十九常行堂摩多羅神事、六三二～六三三頁。

(24) 山本ひろ子　二〇〇三『異神』ちくま学芸文庫、二七一頁。

(25) 夜叉と類似し、ときには混同される羅刹も障礙神から護法善神になり、夜叉と同様、毘沙門天の眷属となっている。十羅刹女の護法善神への転換については、以下の書が詳しい。小田悦代　二〇一六『呪縛・護法・阿尾奢法～説話にみる僧の験力～』日本宗教民俗学叢書九、岩田書院。

(26) 毘那夜迦との関係でいえば、軍荼利明王が挙げられる。軍荼利明王は、毘那夜迦を調伏する役割を担っており、実際、毘那夜迦を踏む像容も伝えられている。調伏する者が、調伏される者と習合することはよく知られており、その意味では、軍荼利明王が毘那夜迦と習合して、三宝荒神と結びつく可能性はないわけではない。例として、悪鬼を退治する天刑星が、疫病をもたらす牛頭天王を調伏するが、やがて両者は習合したことが挙げられる。その結果、牛頭天王に、疫病を防ぐ神としての性格が加えられた。しかし、軍荼利明王は一面八臂であり、三面六臂の三宝荒神とはその像容が大きく異なることから、軍荼利明王と毘那夜迦・三宝荒神の間では習合は起こらなかったと考えられる。

（武蔵野大学仏教文化研究所研究生　博士（仏教学））